

日本語学から地域ブランド研究に期待すること

山田 健三

1. 前景化される「地域」、背景化する「全国」

「地ビール」「地鶏」「地粉」といったことはもう珍しいものではなく、私の勤務している大学の生協では、「信大饅頭」といった大学ブランドを冠した商品も作られ販売されている。（ちなみに「信大饅頭」を作っているのは、松本の老舗和菓子舗である「開運堂」という有名店で、味は確か。）こういった動きは、全国の大学であるようで、大学は、いきおい「地元特産物販売所」の役割を併せ持つようになってきている。（実は地元産でないものに、地元産だというラベリングをしている怪しいものもあるようではあるが。）

近年の「地域」を特化させようとする動きは、「全国共通」の価値をできるだけ後ろへ押しやり（背景化）、「地域特有」の価値を浮かび上がらせる（前景化）、という遠近手法によって描かれている。

2. 「地域」の前景化は幸せか？

上述のように、「地域の前景化」は、同時に「全国価値の背景化」を意味するわけであるが、これは国を挙げて「地域」に主役をはらせよう、苦節何十年の役者たちに、いきなりスターの座を得るチャンスを与えよう、とするものであり、一見、喜ばしいようにも見えるが、果たして主役（「勝ち組」といってもいい）はそんなにたくさん必要なのだろうか。競争社会は、サービス業に見られるごとく、質の向上が期待できるという意味で、プラスの側面があるが、あまりに過剰な競争原理は「生きにくい」世の中を生むことは必定である。民意が

本当にそれを望んでいるとは、私には到底思えない。

3. 言語生活における「地域」の前景化

さて、ようやく「日本語」との関わりである。

「地日本語」ならぬ「方言」は、かつては、言語政策上、教育現場で罰則として行われた「方言札」に代表されるように、排除すべきものとして考えられていたが、今では「暖かみ」のあるプラスイメージを獲得するにいたっているし、近頃では、女子高生の間で、全国各地の方言を織り交ぜた言い方やメールが流行しているらしく、『ザ・方言ブック』（コトバ探偵団編、日本文芸社刊、2005年7月）という女子高生をターゲットにした本の表紙には「じゃけえ、方言って、なんかやさしいカンジがしてよかとね」「んだよね、なまら、めんこいべさぁ」と会話する女子高生ギャルのイラストが描かれている¹⁾。

また、方言をも扱ったテレビのバラエティ番組も人気があるようである。こういった方言意識の変化は、大局的には、明治以降の日本の近代化が、いわば「言語のインフラ整備」として、標準語の全国普及を果たした結果、つまり「標準語」を前景化させた結果、背景化した「方言」へ、逆に好奇のまなざしが生じ、一転、前景化し出したように見える。

しかし、これは特定の地域に対する評価価値の向上ではなく、「地域」「地方」であること自体が評価を得ているのであって、「村おこし」につながるものではないだろう。つまりレア物、限定品・コレクターズアイテム的感觉で重宝されているだけのことである。

4. 日本語研究との関わり

こういった感覚が、一般社会に存在するのは仕方ないが、「研究」と謳うアカデミズムの世界でのこととなると、少し困る。

研究への動機が対象への関心から始まるのは普通のことであるから、オタク的なところから研究に入ること自体は決して悪くない。むしろそういった嗜好がなければ、地道な調査・フィールドワークを続けることは困難かも知れない。

方言研究自体は現在でも盛んで優れた研究が毎年生み出されている。しかし、方言研究者が、「方言」という言語変種のみを目を奪われているのだとしたら、それはとても、残念なことである。同じことは、標準語を言語データとして扱っている研究者も同じである。「標準語」も言語変種の一つに過ぎない。

特に、文法研究に著しいように思うが、標準語のみをデータとして扱う文法研究者と、方言のみを扱う研究者との間に、これまではあまり積極的な学術的交流が見られない、というか、両者を等しく「日本語文法」として根本から考えようという視野の広い研究者はあまり多くなかったように思われる。もちろんそういう状況になったことは、研究史から見ればそれなりに理由のあることではあるが、そもそもが狭い社会の中で更に蛸壺的安住を求めることは、やはり望ましいことではない。

学界での領域分類も、標準語文法研究は「文法」に、古語文法研究は「国語史」に、方言文法研究は「方言」に分類されることがむしろ普通であるぐらいであるから、学界内での認識にも問題がありそうである。

しかし、近年徐々にではあるが、方言データと古語データとを等しく扱う若手研究者も出始めてきているし、以上の問題意識を明確にもって日本語文法研究に挑んだ研究書（丹羽一彌『日本語動詞述語の研究』笠間書院、2005年3月刊）も現われた。

日本語の研究といえば、一般には標準語が対象であり、方言は別扱いになっている。講座ものでは、音韻や文法などとは別に「方言」という

巻や章の設けられている場合が多い。『国語年鑑』などの文献目録でも同様である。これでは方言の音韻や文法の研究は日本語の音韻や文法とは別の分野ということになってしまう。標準語は日本語の中の一変種にすぎないし、しかも特徴的な変種である。そのような言語だけを対象としていては、日本語という言語の本質的なところを捉えることはできない。(丹羽一彌 (2005: 2))

これは、同書における丹羽の開口一番の言である。全く同感である。つまり、方言も含めてあらゆる言語をまずは色眼鏡なしに客観的に観察するところから言語研究をはじめ、ということを経験言語学、記述言語学はかつて教えてくれたはずであるが、いつのまにか、標準語も含めて言語変種に必要以上に拘る研究になってしまっていないだろうか。

願わくは「方言」と「標準語」を前景化／背景化させる対立項ではなく、両者を同一のレベルで扱うことが当たり前の研究状況になることを期待してやまない。

5. 地域ブランド研究への期待

以上の日本語学の現状に対する私なりの問題意識から、新たな研究領域として帆を揚げた「地域ブランド研究」が、「地域」を前景化させる実学的方法に汲々とするようなことにはなってほしくない、と切に願う。それは、「地域」を過度に「前景化」させなければいけない生き方は、あまりに窮屈であると思われるからである。アカデミズムが「窮屈な生き方」を助長するための理論装置としての役割を担うことは、……。もう後は言わずともいいだろう。

- 1) ちなみに英語でもコックニー方言などをわざわざ使う日本人女子高生もいるようである。

(やまだ・けんぞう／信州大学人文学部助教授)